

## 波の荒れる夜など心配で眠れなかった 築港工事を設計した廣井博士の回顧談

小樽の築港工事理め立て工事の設計をなし第一防波堤の工事に辛勞をなめた工学博士廣井勇氏は、目下東京牛込の閉居に悠々自適して各地方の港湾において、今なお研究を続けておられる。博士を訪れて回顧談を聞く。博士は在樽當時を思い出されてぽつりぽつりと語る。

小樽の築港は、確か明治26年が最初で、故北垣男が北海道長官で、故井上侯が内務大臣の時であったと思う。当時、政府は横浜の築港に大失敗をしてこりごりしていたので小樽に築港をするなどということはもってのほかというような風が見えた。ところが、井上侯が内務大臣で東北および北海道を視察にやってきて小樽の地勢を見て北垣長官から大いに小樽港を修築する必要を聴取し、侯はなるほどと合点し共鳴した。そこで、政府ではともかく小樽港修築の試験費用として1万8千円を支出することになった。これで700間ばかりの防波堤を築いてみて波に耐えることが証明ができれば、いよいよ工事に着手する段取りとなるわけだった。これは上手くいった。

当時の井上侯の勢力というものは実にたいしたもの、また恐れられたものであった。しかして北海道及び小樽の発達はこの井上侯の尽力と北垣男の努力にすこぶる負うところが多いのであっていやくも小樽及び北海道を論ずるものの感謝記憶すべき大恩人であると思う。すなわち、明治30年になって小樽港修築費212万円が議会の協賛を経ていよいよ着手することになったのも一に井上侯の尽力によったというても良いくらいである。

私は小樽の方へ行く前に函館で少し築港の仕事をした。その時砂が海面に流出して水深を浅くする結果だんだんに船が海岸近くまで来ることができぬようになり、荷揚げ等が非常に困難するから防波堤を作る必要があると侯に話した。侯は早速承知して作ることになった。その後、侯が再び函館にやってきて海の中へ素っ裸になって入って調べてみると、防砂堤はこしらえたが函館区ではちっとも構わぬのですっかり浅くなって砂が一杯になっているので侯は烈火のようになって案内役の区長を詰問して「政府が貴重な国費をさいて防砂堤を函館のためにこしらえてやったのにこの有様は何事だ」と例の癩癩玉を破裂させて目の玉の出るほどしかりつけたと云うことであったが、こういうように侯の癩癩玉は非常な有名なもので、当時の人は一番怖がっていたひとであったがその代わりに一度是なりと信じ、やろうとしたことはどんな妨害があってもやり通さねば承知せぬと云う火のような誠意熱情を有していた偉人であった。それで小樽の築港なども横浜の次に着手することができたのであった。

井上候が視察に来られたときはまだ小樽と札幌の間でしか鉄道がなかった時分で、候は今の大臣や局長連の形式一遍の遊戯的な視察などと違い、馬に乗ったり汽船に乗り草鞋がけで精細に土地民情を視察したのであった。私はこのことを思うとこのように親切な勇敢なる政治家の喪失を国家のために惜しまないわけにはいかない。井上候とともに北垣長官も大変北海道の開拓のために努力されたが、北垣男は土地を持っておられたのでその土地の利益を握るためだと悪口を言われ余り評判は良くなかったが、これは誤解であるのはもちろんのことで、私は井上候や北垣男のごとき人がおられたならば北海道の開拓上どのくらい大に見るべきものがあつたらうかと残念に思われてならないことがしばしばあつた。

212万円という金は今では問題するような金ではないが、当時の国家の状態と貨幣価値から考えれば実に巨額の経費であつた。小樽区民をはじめ私らはまるで鬼の首でも取つたように喜び勇んだものであつた。何でもはじめは7カ年の継続事業と言うことであつたが戦争なんかで10年余りになつたと思ふ。今日では港湾にも土木にも鉄道にも大家揃うという有様であるが、当時はその人たちがまだ卵の時代であつたから私はこの大任を負つて非常に心配した。当時、セメントというものはまだ使つた経験がないのでどういふ具合に使うものかよく分かつていない。何でも横浜築港の失敗はセメントの使い方が悪かつたといふのであつたからこれにはすこぶる頭を悩ました。そして、あるフランスの雑誌を読むとセメントに火山灰を混ぜると非常に具合が良いといふのであつたから早速試験して見た。すると大変上手くいつた。そこで盛んにこれを取り寄せたが後には小樽の近くで取れたので大変工費も助かつた。友人らが来て「君そんなものをつかうと2~3年経つとゾクゾク続々と波に浚われていくぞ」などと冷やかしたり脅かしたりするので、大した確信もないこととて冷や冷やしながらやつていた。仕事をやっているときあるとき暴風雨がやつてきて海が大いに荒れて激浪がドブンドブンと高く海岸に打ち寄せてきた。その時は夜などどうしても寝ることもできない。この暴風雨で防波堤が壊れたら切腹するほかないと度胸を定めて夜明けを待つて見回りに出かけた。すると心配したような損害は受けなくてチャンとしていたのでヤレヤレとガツカリしたことであつた。こんなことが二度あつてからは度胸がよくなってあんまり風が吹いても梅が荒れても気かけぬよふになつた。今から思ふと随分ばかばかしいよふなことでも、その頃は頭が幼稚で経験が足りなかつたから真剣になつて考へたり研究したりしたものであつた。

火山灰を使うことは私が小樽で使つたことが日本で最初の試みでそれから今ではどこでも使わぬ所はないという有様です。今の道庁の港湾課長の伊藤くんなど私と一緒によく勉強して働いた有望なる技術家として、明治42年に着手した第二期工事などはほとんど一人で設計したり、着手したといつてもよいくらいです。ご承知の通り小樽は石狩平野を後に控えておつて北海道の最要部に位し将来大いには発達の可能性があるから港湾の規模はよほど大きくしても宜しいと思つて当初私たちはできるだけ遠大な計画を立ててきました。私の時にも欧米の港のごとく船が棧橋に横付けできる埠頭をこしら

えてやろうという人もいたが、まだその時機に達していないので止めましたが、ちょうど今は埠頭をこしらえたり、海陸の連絡設備を完成するに都合の良い時機になっている。すなわち、先の議会に出た小樽港修築ならびに海陸連絡設備完成の両建議案はまことに時宜に適していると思うからぜひ速やかに着手して貰いたいものである。

室蘭も港湾としては上海釜山などと共に東洋における最も優れたものであるから相当の経費を投ずれば大いに発展する可能性があるのに惜しむべき事である。私らが仕事を北海道でやるちょっと前頃でした。自由党の林有造さんが小樽で埋め立てをやって大変に成金になったことがあります。それで、埋め立てをやれば儲かるという評判が立って全国に埋め立てが流行したことがありました。その林さんの儲けたお粗末な埋め立てで私どもはさんざん泣かされました。少し雨が降り、波が来ればどんどん崩れていくのでしたからね。いろいろな喜悲劇を生んだ懐かしい小樽も追々に成長してきましたが、私はご覧の通りの老人となり、今では小樽には渡辺兵四郎さんと金子元三郎さんくらいしか知る人もないくらいに年を取り、新人の邪魔になるくらいですから世間から引退してしまいましたが、小樽港修築の落成と言うことは力強い壮年時代の愉快的記憶を喚起させる誠に嬉しい消息です。小樽港および北海道発達のため更に若い人たちが努力されんことを欲しています。

[注釈]

文中の「井上候」とは、周防国(山口県山口市)出身の井上馨(1836-1915)で、黒田内閣で農商務大臣(1888-1889)、第二次伊藤内閣で内務大臣(1892-1894)を歴任している。

文中の「北垣男」とは、但馬国(兵庫県)出身の北垣国道(1836-1916)で、第4代高知県知事(1879-1881)、第7-8代徳島県知事を兼任(1879-1880)、北海道長官(1892-1896)、拓殖務次官(1896-1897)を歴任している。

右城猛・記